

受領No. 1686

ドローンとインタビューを用いたモノとコトの図示： フィリピンの低所得者層住宅地にみるインフラの社会学

代表研究者 遠藤 賢也（東京大学大学院 新領域創成科学研究科 博士課程学生）

Mapping Unevenness—How the Material Infrastructure of Water Shapes Post-disaster Communities in the Philippines

Representative Kenya Endo (PhD Student, Graduate School of Frontier Sciences,
The University of Tokyo)

研究概要

本研究では災害集団移転住宅地を対象に、上水インフラの不均質な分配の背景と、住民の適応策について解き明かすことを目的とする。研究対象地は、2013年11月に同国史上最大の台風ヨランダによる被害を経験し、“災害に強い”都市を目標に復興を推し進めてきたフィリピンのタクロバン市である。もともと非正規居住の身であった被災者の多くは、移転後10年近く経過した今でもなお、劣悪な上水インフラの整備により毎日の生活に苦慮している。水を巡る共同のルール作りがなされている地区がある一方、協働の意識の薄い地区、また地理的に水が届きにくい地区、生活排水に悩まされる地区というように、住宅地内における水問題が地区の社会性や空間性と密接に関連していることが示唆された。本助成プログラムでは、ドローンとインタビュー、さらには住民ワークショップを組み合わせる中で、人と社会と環境の動的な関係性がインフラを形作っていることを説明する。より広義には、インフラを作る主体は誰か？、そして、それはどのような交渉によって、作られ、利用され、変容していくのか？という社会学的な問いに答える。